

橋本努 編『現代の経済思想』刊行記念 「キーワードで読む現代の経済思想」フェアブックリスト

欲望とは？ 価値とは？ 資本主義とは？ ……

こうした根本的な問いに対して、現代の知見を駆使しながらストレートに応じようというのが本書の企てである。主流の経済学はこれまで、根本的な問題に定義以上の答えを与えてきたわけではない。たとえば「経済」とはなにかと言えば、それは家政であり、節約であり、交換であって、そうした用語法の集積としてイメージされる。けれどもこれらの用語法の背後にまわって経済の本質をつかみとろうとすれば、関連する諸概念についての探究があわせて必要になってくる。経済の本質とはすなわち、資本主義の問題であり、価値の問題であり、あるいは欲望の問題等々であって、これらの問題が系(コラリ)をなしたところに答えを宿している。こうしたいわば、数珠つなぎの問題系に取り組もうというのが経済思想の本義にほかならない。

むろんそのような探究は、哲学であって、経済学の領分ではないと言われるかもしれない。けれども専門研究の分野が拡散している現在、ものごとへの本質的な問いかけはますます重要になっている。探究に値する経済の問題は、テクニカルな問題を超えて、深く洞察するという思想的な構えと密接に結びついているからである。あるいは専門的な経済学に関心がなくても、私たちは日々の生活を営むなかで根本問題にぶち当たることがあるだろう。そもそもこの私の生は、社会のなかでどんな意味をもっているのだろうか。人生はこんなものでよいのだろうか。まっとうな社会とは何か、云々。こうした問いに応じるさいにも、経済思想の問題は切実となる。経済思想は、経済認識の根幹にあつて、欲望、価値、文化、自然、等々の概念連関を伴いながら、広く「人間と社会」の基礎論をなしているからである。

——「まえがき」より

現代の経済思想 橋本努 編

不透明な「いま」を生き抜くための、「生と社会」の指針。

22のキーワードで経済をめぐる普遍的な問題を読み解き、注目すべき最前線の議論を紹介。

【目次】

1 生きるために

快樂／欲望／幸福／贈与／労働

2 善い社会のために

価値／平等／ケア／所有／資本主義

3 経済の倫理

自然／消費／交換／文化と経済／芸術の売買

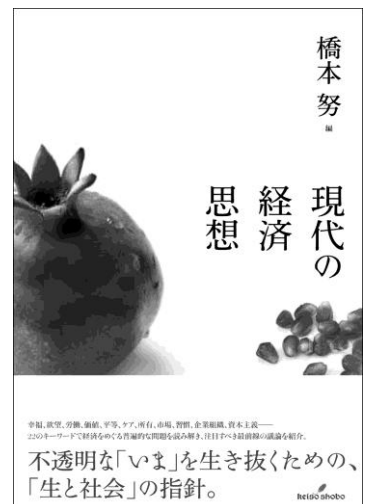
4 経済の生態

市場／慣習／嗜癖／心理／企業組織／企業家精神／経済神学

2014年10月刊行

●定価：本体5,500円＋税

A5判上製644頁 / ISBN978-4-326-50402-2 C3033



快樂主義の哲学 (文春文庫)

澁澤龍彦

成功したサラリーマンなど、快樂主義者としては最低の部類では？ デイオゲネスからジャリにいたるまで、ダンディな一匹狼たちの軽妙な社会批判と自己崇拜から学ぶ、痛快な人生指南書。

欲望について (白揚社)

ウィリアム・B・アーヴァイン

最新の哲学や生物学の成果をふまえて、欲望の本質を再検討。加えて、マルクスが理想とした「家族の廃止(子供の共有)」や「女性の共有」を試みた集団を紹介。アメリカ図書館協会CHOICE誌2006年度優秀賞受賞。

幸福度をはかる経済学 (NTT出版)

ブルーノ・S・フライ

所得が増えても幸福にならない先進国の人々。国民全体が幸せになるためには、むしろ不幸の大きな要因である失業に対処すべきではないか。幸福度をデータで測る新しい経済学の動向を紹介した好著。

労働のメタモルフォーズ 働くことの意味を求めて 経済的理性批判 (緑風出版)

アンドレ・ゴルツ

マルクスの労働思想を理論的に結晶化した名著。共産主義実現のためには、賃上げよりも労働時間の短縮のほうが望ましいというが、その背後にある論理はいまなお色あせていないのだから不思議。

貨幣と欲望 資本主義の精神解剖学 (ちくま学芸文庫)

佐伯啓思

貨幣欲に駆られた人間は、グローバル化の遠心力を発動させて国家を侵食していく。その背景にある論理を、錬金術、古代ユダヤ教、フロイト＝ラカン、ハイデガーなどの知見を駆使して浮き彫りにした快著。

ギフト エロスの交易 (法政大学出版局)

ルイス・ハイド

商品の対極にあるのは人間の内なるギフト(贈物＝才能)。それを外化したものが文化。芸術家は自分の才能を、教師やセラピストは他人の才能を、それぞれエロスの力で引き出すことに注目。ギフトの美学を描く。

機械との競争 (日経BP社)

エリック・プリニョルフソン／アンドリュー・マカフィー

レトロで怪しい装丁だが、機械との競争に敗れるのでは？と疑念を抱く中間大衆層の不安を代弁。チェスの名人も機械に負ける時代。でも名人とコンピューターが協力すれば、コンピューターより強いのだ。

怠ける権利 (平凡社ライブラリー)

ポール・ラファルグ

キューバ生まれ。マルクスの次女と結婚。エンゲルスの支援で生計を立てた。労働者を苦しめているのは、勤労を神聖視し、偽りの欲望をかきたて、消費を煽る資本主義のシステム。根本的な離脱こそ必要と説く。

遊びと人間 (講談社学術文庫)

ロジェ・カイヨワ

遊び論の古典。競争・運・模擬・眩暈の四類型で「遊び」を捉え、それが現実世界から隔離されなければ人間を墮落させると主張。身を滅ぼさないためには、自己の内なる仮想世界を育む知恵が必要だ。

人間の条件 (ちくま学芸文庫)

ハンナ・アーレント

『全体主義の起源』とならぶアーレントの著書。強制反復の営み＝労働、自己管理による製作＝仕事、不確実で物語的な生き様＝活動。三つの理想の対比によってマルクスの理想とは異なる人間像を提起する。

利己的な遺伝子 (紀伊國屋書店)

リチャード・ドーキンス

ウィルソンらによって築かれた社会生物学等の知見を一般向けに解説したベストセラー。人は自分を利するよりも、集団の繁殖率を高めるために他者を気づかう。集合遺伝子ミームに操られているというわけだ。

ピグーの思想と経済学 ケンブリッジの知的展開のなかで (名古屋大学出版会)

本郷亮

カール・ポランニー 市場社会・民主主義・人間の自由 (NTT出版)

若森みどり

近代の労働観 (岩波新書)

今村仁司

欲望するシステム (ミネルヴァ書房)

黒石晋

リビドー経済 (法政大学出版局)

ジャン＝フランソワ・リオタール

2 善い社会のために——価値／平等／ケア／所有／資本主義

ショック・ドクトリン(上・下) 惨事便乗型資本主義の正体を暴く (岩波書店)

ナオミ・クライン

『ブランドなんか、いらない』に続く話題のベストセラー。1970年生まれの著者はジャーナリスト。本書で、戦争や災害などの惨事に便乗して市場原理を押しつける産官一体型のコーポラティズムを徹底批判。

価値の帝国 経済学を再生する (藤原書店)

アンドレ・オルレアン

小生が憧れる才能。新古典派経済学はなぜ経済の本質をつかんでいないのかを批判し、貨幣が社会の秩序と無秩序を生み出す論理を独自に構築。その透徹した分析力に現代経済思想の可能性を感じる。

なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？

新自由主義社会における欲望と隷属 (作品社)

フレデリック・ロルドン

最近、仕事にやりがいを感じる人が増えてきた。だがそれは新自由主義の巧妙な策略ではないのか。喜んで働く賃労働者たちが、経営者たちをますます儲けさせていくという罠をスピノザ哲学に依拠して解明。

経済学・哲学草稿 (光文社古典新訳文庫)

カール・マルクス

すべてはここからはじまった。若きマルクスの思考は、経済を哲学する苦悩そのもの。これを読まずして社会を語れない。社会の矛盾をどう言語化するのか。考える力を育むための必携書である。

なぜ女性はケア労働をするのか 性別分業の再生産を超えて (勁草書房)

山根純佳

ケアワークは女性にふさわしいとする「ジェンダー構築」をどう考えるべきか？ 女性の本来性など存在しないのでは？ 支配的な社会構造と道徳を根本的に問いなおすための、経済思想のフロンティア。

私的所有論 第2版 (生活書院)

立岩真也

日本を代表する独創的達成。私の身体は私のモノという想定は怪しい。だがその懐疑がどこまで正しいのかも怪しい。すると出生前診断や人工妊娠中絶をどう考えるべきか。徹底的に考え抜く。

自由はどこまで可能か リバタリアニズム入門 (講談社現代新書)

森村進

森村著『財産権の理論』は、日本発のオリジナルな規範理論として世界に誇るべき達成。本書はその入門編で楽しく読める。私たちの通念を批判するその姿はどこか軽妙。リバタリアン信者を獲得している。

所有と進歩 プレナー論争 (日本経済評論社)

ロバート・プレナー

資本主義の起源とは？ 1976年の論文で著者は、停滞する封建制から持続的に成長する資本制への移行が、貿易の拡大よりも農業生産性の上昇によってもたらされたと主張。その後の論争を自ら総括する。

経済と倫理 福祉国家の哲学 (東京大学出版会)

塩野谷祐一

規範理論からみた経済思想の網羅的な教科書。約10年前の議論の到達点を俯瞰できる。福祉国家の柱は正義と卓越であるとして、民主主義、資本主義、社会保障のバランスが模索される。

あなたが平等主義者なら、どうしてそんなにお金持ちなのですか (こぶし書房)

ジェラルド・アラン・コーエン

お金持ちなのに平等主義者なんて、なんとも居心地が悪いのでは？ コーエンはこの問いを自分に向け直し、なぜ莫大な寄付をしないのかを正当化。苛酷なまでに愚直だが、避けて通れない思索を展開する。

ベーシック・インカムの哲学 すべての人にリアルな自由を (勁草書房)

フィリップ・ヴァン・パリース

自由社会とは管理されない社会。「働く気があるかどうか」など、人のプライバシーをいちいちチェックしないで、働かないサーファーにも生活費を支給すべきだと主張。その方が福祉予算も安上がりになるか。

ニーズとは何か (日本経済評論社)

ハートレー・ディーン

必要最低限の生活の中身は、「ニーズ」概念の解釈によって自在に変化する。本書はさまざまな分類を試み、ヒューマニズムの立ち位置を明確化。解釈しだいで何でもニーズになる可塑性を徹底的に理論化する。

貧困のない世界を創る ソーシャル・ビジネスと新しい資本主義 (早川書房)

ムハマド・ユヌス

バングラディッシュの大飢饉を受けて、貧しい人に少額の無担保融資をするグラミン銀行を創設。その仕組みは世界中に広がりをみせ、ユヌスは2006年にノーベル平和賞を受賞。貧困問題への新しい解決策を提起。

正義のアイデア (明石書店)

アマルティア・セン

研究の軌跡全体を、著者がみずから講義テキスト風にまとめた入門書。「ケイパビリティ」概念によって理論と思想を同時に発展させたこの偉人はアイディア・マン。背景にインドのバラモンの発想がある？

ミュルダールの経済学 福祉国家から福祉世界へ (NTT出版)

藤田菜々子

じゅうぶん豊かで、貧しい社会 理念なき資本主義の末路 (筑摩書房)

ロバート・スキデルスキー／エドワード・スキデルスキー

愛の労働あるいは依存とケアの正義論 (白澤社)

エヴァ・フェダー・キテイ

ケインズとカレツキ ポスト・ケインズ派経済学の源泉 (名古屋大学出版会)

鍋島直樹

ガンディーの経済学 倫理の復権を目指して (作品社)

アジット・K・ダースグプタ

余剰の政治経済学 (日本経済評論社)

沖公祐

市場社会の思想史 自由をどう解釈するか (中公新書)

間宮陽介

正義・ジェンダー・家族 (岩波書店)

スーザン・M・オーキン

ケインズかハイエクか 資本主義を動かした世紀の対決 (新潮社)

ニコラス・ワプショット

労働者の味方マルクス 歴史に最も影響を与えた男マルクス (現代書館)

橋爪大三郎／ふなびきかずこ(イラスト)

3 経済の倫理——自然／消費／交換／文化と経済／芸術の売買

この最後の者にも・ごまとゆり (中公クラシックス)

ジョン・ラスキン

「食わせてもらう諸君の権利を主張せよ。しかしそれよりも高徳で、完全で、純粋であるべき諸君の権利を、さらに声高らかに主張せよ。」19世紀イギリスの賢者ラスキンから、凛とした精神を学びたい。

〈脱成長〉は、世界を変えられるか？ 贈与・幸福・自律の新たな社会へ (作品社)

セルジュ・ラトゥーシュ

市場からも福祉国家からも離脱して、より少なく働き、より少なく消費するシンプル・ライフを提唱。トルストイやガンディーに学び、ローカルな協同組合活動やフェア・トレードなどの営みを称揚する。

創造的破壊 グローバル文化経済学とコンテンツ産業 （作品社）

タイラー・コーエン

経済のグローバル化は、文化を平板化・均質化するわけではない。マイノリティの文化に新たなマーケットを与え、異文化接触のなかで独創的なスタイルを生み出す現実を追跡。新しい文化創造の可能性を探る。

文化政策の経済学 （ミネルヴァ書房）

デイヴィッド・スロスビー

2002年の『文化経済学入門』に続く待望の続編。定番のテキスト。文化は経済では測ることのできない固有価値をもつとして、では政策はどうあるべきか。体系的な視点を提供する。

自然農法 わら一本の革命 （春秋社）

福岡正信

初版は1975年。資本主義のオルタナティブを農業に求め、その後雄大な思想体系を確立。すべては「無」であるとする境地は、まるで現代の老子。諸外国語に翻訳され世界的に注目を浴びる名著である。

内山節著作集6 自然と人間の哲学 （農山漁村文化協会）

内山節

全15巻の計画で、最近刊行された第一回の配本がこれ。『労働過程論ノート』でデビューした著者の主著。群馬の寒村に移り住み、家庭菜園や釣りから学んだ自然融和の労働思想がここにある。

経済的思考の転回 世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜 （以文社）

桑田学

マイホーム神話の生成と臨界 住宅社会学の試み （岩波書店）

山本理奈

儀礼としての消費 財と消費の経済人類学 （講談社学術文庫）

メアリー・ダグラス／バロン・イシャウッド

言葉と物 人文科学の考古学 （新潮社）

ミシェル・フーコー

ハイ・イメージ論1 （ちくま学芸文庫）

吉本隆明

貨幣論 （ちくま学芸文庫）

岩井克人

ホモ・ルーデンス （中公文庫）

ホイジンガ

マルクスその可能性の中心 （講談社学術文庫）

柄谷行人

それをお金で買いますか 市場主義の限界 (早川書房)

マイケル・サンデル

代理母による妊娠代行サービスは望ましいのか？ 本来お金で買えないはずのモノに、すでに値段がついている現実をえぐった好著。答えは読者に託されるが、必要なのは議論。社会の良識を形成していくことだ。

選択の科学 コロンビア大学ビジネススクール特別講義 (文春文庫)

シーナ・アイエンガー

選択肢を広げすぎると人生はうまくいかない。恋愛結婚よりも見合い結婚、自由な宗派よりも原理的な宗派のほうが人生を満足させるというが、なぜ？ 選択をめぐる不条理を分かりやすく解説する。

経済は「競争」では繁栄しない

信頼ホルモン「オキシトシン」が解き明かす愛と共感の神経経済学 (ダイヤモンド社)

ポール・ザック

他者を信頼すると、血中のオキシトシンが急上昇する。ならばその分泌を促して競争を和らげ、理想の社会を作れないか。ただ、オキシトシンが普段から過剰だと人を信頼しないというのだから悩ましい。

競争社会をこえて ノー・コンテストの時代 (法政大学出版局)

アルフィ・コーン

競争にもいろいろあり、どんな競争を望ましいとするかで社会の品格が決まる。行動心理学などの知見をふんだんに取り入れ、競争理論に豊かな幅を与えたユニークな書。アメリカ心理学会賞。

ファスト&スロー(上・下) あなたの意思はどのように決まるか？ (ハヤカワ文庫)

ダニエル・カーネマン

プライミング効果やプロスペクト理論など、著者自らが開拓の一端を担ってきた行動経済学の達成を一般読者にわかりやすく解説。「合理的経済人」の誤りを正し、組織運営のための新しい発想を提供する。

誘惑される意志 人はなぜ自滅的行動をするのか (NTT出版)

ジョージ・エインズリー

マイクロ経済学の間人間は、双曲線割引に関して矛盾を抱えていると指摘。よりいっそうマイクロの心理前提から、経済合理性の諸困難を突き止める。本書は主著『ピコ経済学』の一般読者向け版。楽しく読める。

ゾンビ経済学 死に損ないの5つの経済思想 (筑摩書房)

ジョン・クイギン

タイトルも装丁もB級だが、中身は本格的。現実の経済政策はどれも破たんした経済思想によって正当化されざるを得ない。効率性市場仮説から民営化論まで、現代の政策論議の背景にある思想をみごとに再構成。

イノベーションのジレンマ 技術革新が巨大企業を滅ぼすとき (翔泳社)

クレイトン・クリステンセン

CDよりもMP3、パソコンよりも携帯端末。性能が悪くても使い勝手がよければ普及する。だがそうした破壊的イノベーションに大企業はことごとく躓いてきた。その原因を解明した本書は現代企業家論の古典。

資本論の哲学 (平凡社ライブラリー)

廣松渉

小生は学部時代に佐藤金三郎ゼミで読んだ。理解したとは言えないが、圧倒的な強度だけは印象に残り、その後の研究の範となった。振り返るとこれが世界最高水準の経済思想。中国では廣松研究がいまも盛ん。

制度論の構図 (創文社)

盛山和夫

人はなぜ依存症になるのか 自己治療としてのアディクション (星和書店)

エドワード・J・カンツィアン／マーク・J・アルバニーズ

ケインズとハイエク 貨幣と市場への問い (講談社現代新書)

松原隆一郎

ハイエクの経済思想 自由な社会の未来像 (勁草書房)

吉野裕介

市場を創る バザールからネット取引まで (NTT出版)

ジョン・マクミラン

ルールに従う 社会科学の規範理論序説 (NTT出版)

ジョセフ・ヒース

組織と市場 組織の環境適合理論 (千倉書房)

野中郁次郎

終わりなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか (日本経済新聞出版社)

水野和夫

入門経済思想史 世俗の思想家たち (ちくま学芸文庫)

ロバート・L・ハイルブローナー

[選書&紹介文] 橋本努(北海道大学教授)

※掲載された書誌情報に誤りがございましたら、悪しからずご了承ください。

また、出版社の事情により品切れ・絶版の可能性のある本も含まれています。

※リストの中には店頭でご準備のない書籍もございます(出版社に在庫があるものはお取り寄せいたします)。